



この宇宙で最も美しい夜明け

『宇宙から帰ってきた日本人 日本人宇宙飛行士全 12 人の証言』

稲泉蓮 著 2019 年 11 月 文藝春秋

少しずつ日常は取り戻されつつありますが、コロナ禍の自粛生活で、街のネオンは少なく、車も減って、大気はきれいになったそうです。6 月は梅雨、毎日の空模様も気になります。そこで今回は、例年より空気が澄んだ空を見上げて、そのずっと遠く宇宙に思いを巡らせてみました。

この本は、実際にその目で宇宙を見てきた日本人宇宙飛行士 12 人の証言によるものです。感想はそれぞれで、大きく違うことが驚きでした。

最も印象的だったのは、日本人初の宇宙飛行士の秋山豊寛氏の感想です。「宇宙から夜明けの地球を見た時、大気の間目で漆黒が深い青へと変化していくグラデーションとなり、次には、赤い波長の光だけが残り深紅に輝く。夜明けだ、と思った瞬間、深紅に染まった縁の部分が一気に真っ白になる。その一瞬は、色が音になってワーッと響きながら迫ってきた、と感じた。様々な色の全てが音になって、心地好い音楽のように自分の身体に入ってくるような気がした。それこそ息を飲むようなうっとりするような美しさでした。」と語っています。「色が音になる、それが自分の身体に入ってくる」とはどのような感覚でしょう。30 年経った今も忘れられないくらい。その後の生き方に大きな影響を与えることになりました。

一方、向井千秋氏は、「帰還時は、名刺すら重く感じた。その重力体験こそが、想定外の驚きだった。そして物が落ちる放物線が美しかった。」と、言っています。宇宙で無重力状態に慣れると、そういう地上の自然界のさまざまな光景に感動できたのだそうです。「それは、大人になると忘れてしまう自然への感激が蘇ったように私には感じられた。」とも。

実際に宇宙を見てきた人の印象は、各々こんなに違います。違いはありますが、いずれも行った人のみが味わうことができる強烈な感覚であること、帰還後長時間が経過した現在もその時の感情は薄れずに強く心に焼き付けられている、というところは、共通しています。「12 人の証言」是非読んでみてください。

そして皆さんも空を見上げてみませんか～

